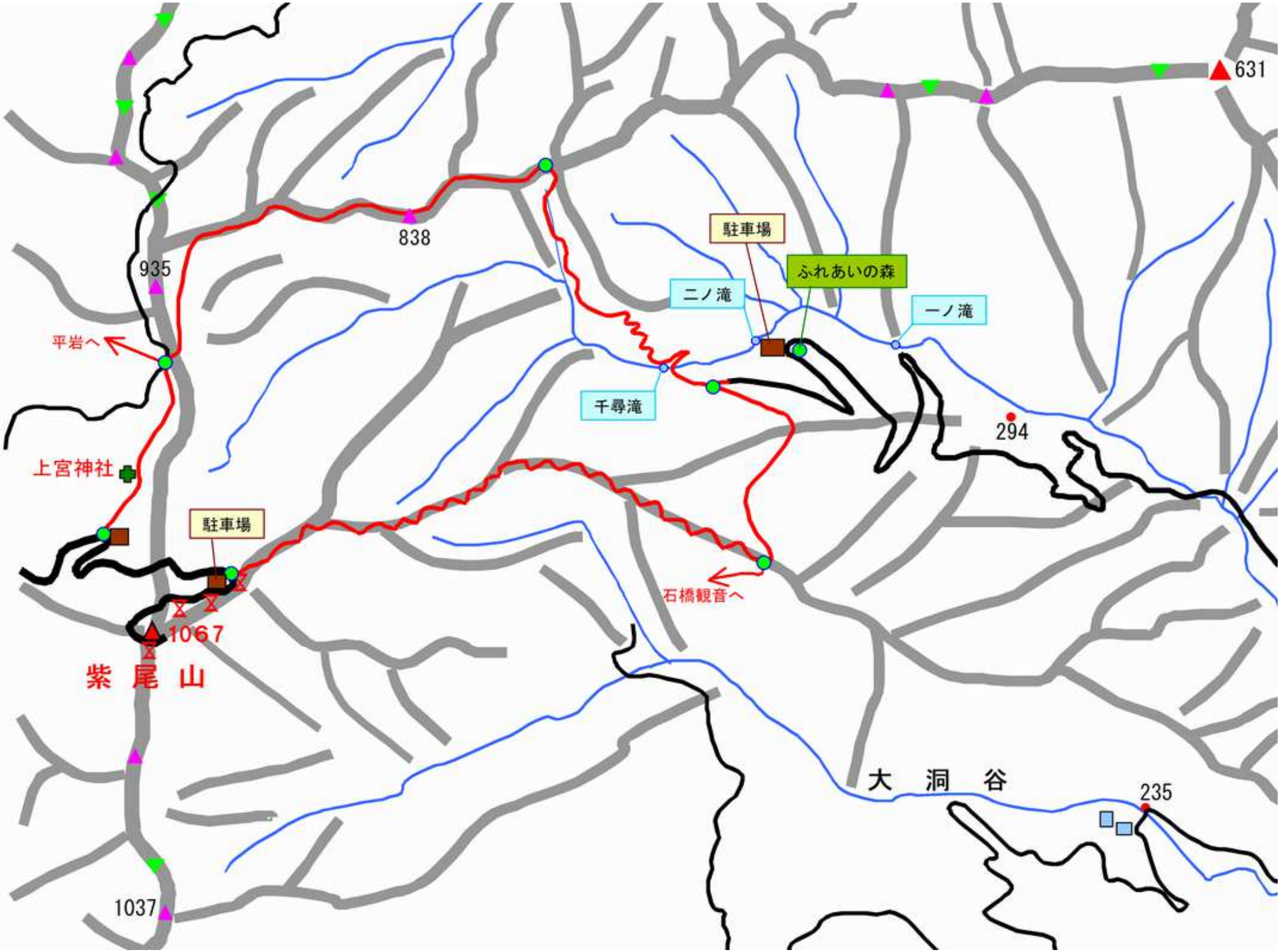
071124　紫尾山(1067m)

５．７ｋｍ　３時間１０分（休憩時間は含まない）※この地図はカシミール３Ｄにより作成したものです



駐車場
↓　0:30
尾根端部
↓　1:10
紫尾山(1067m)
↓　0:20
上宮入口
↓　0:30
下降口
↓　0:40
駐車場

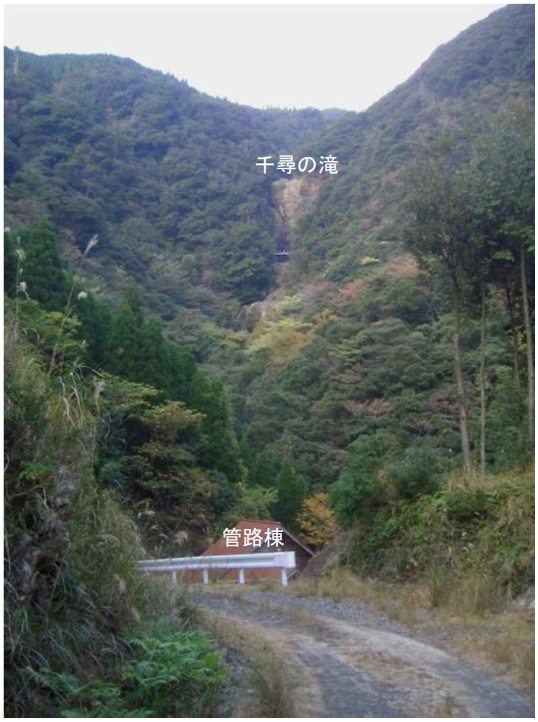
紫尾山　2007. 11. 24

ふれあいの森管理棟

駐車場

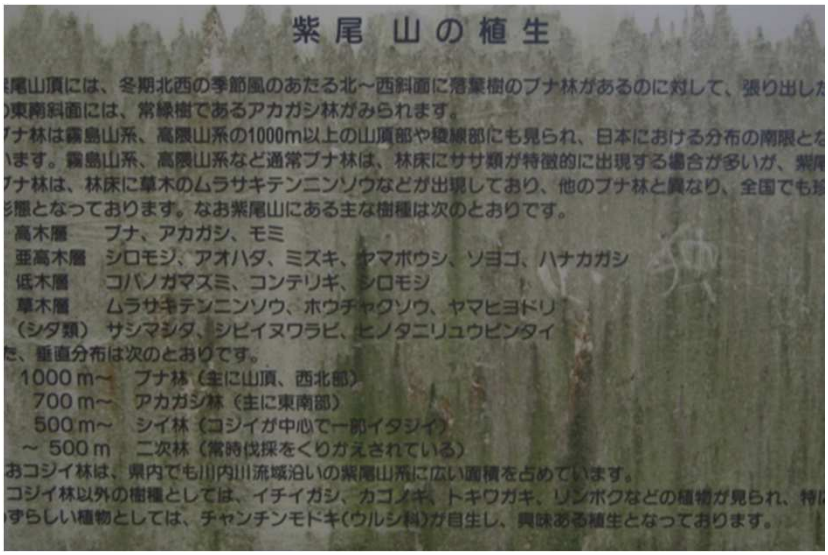
案内板

山ヒルに注意!!



管路棟の先で振り返る

林道を行く



紫尾 山の植生

紫尾山頂には、冬期北西の季節風のあたる北～西斜面に落葉樹のブナ林があるのに対して、張り出した
)東南斜面には、常緑樹であるアカガシ林がみられます。
ブナ林は霧島山系、高隈山系の1000m以上の山頂部や稜線部にも見られ、日本における分布の南限とな
います。霧島山系、高隈山系など通常ブナ林は、林床にササ類が特徴的に出現する場合が多いが、紫尾
ブナ林は、林床に草木のムラサキテンニンソウなどが出現しており、他のブナ林と異なり、全国でも稀
形態となっております。なお紫尾山にある主な樹種は次のとおりです。

高木層	ブナ、アカガシ、モミ
亜高木層	シロモジ、アオハダ、ミズキ、ヤマボウシ、ソヨゴ、ハナカガシ
低木層	コバノガマズミ、コンテリギ、シロモシ
草木層	ムラサキテンニンソウ、ホウチャクソウ、ヤマヒヨドリ
（シダ類）	サシマシダ、シビイヌワラビ、ヒノタニリュウビンタイ

た、垂直分布は次のとおりです。

1000 m～	ブナ林（主に山頂、西北部）
700 m～	アカガシ林（主に東南部）
500 m～	シイ林（コシイが中心で一部イタジイ）
～ 500 m	二次林（常時伐採をくりかえされている）

おコシイ林は、県内でも川内川流域沿いの紫尾山系にない面積を占めています。
コシイ林以外の樹種としては、イチイガシ、カゴノキ、トキワガキ、リンボクなどの植物が見られ、特
すらしい植物としては、チャンチンモドキ(ウルシ科)が自生し、興味ある植生となっております。

紫尾山の植生説明板

分岐の案内標柱

石橋観音分岐

ウロのある樹

□□で5分の案内板

東端のアンテナ

広い駐車場

松木弘安ゆかりのわらうち石

紫尾山(1067m)の方位盤

出水市を見下ろす

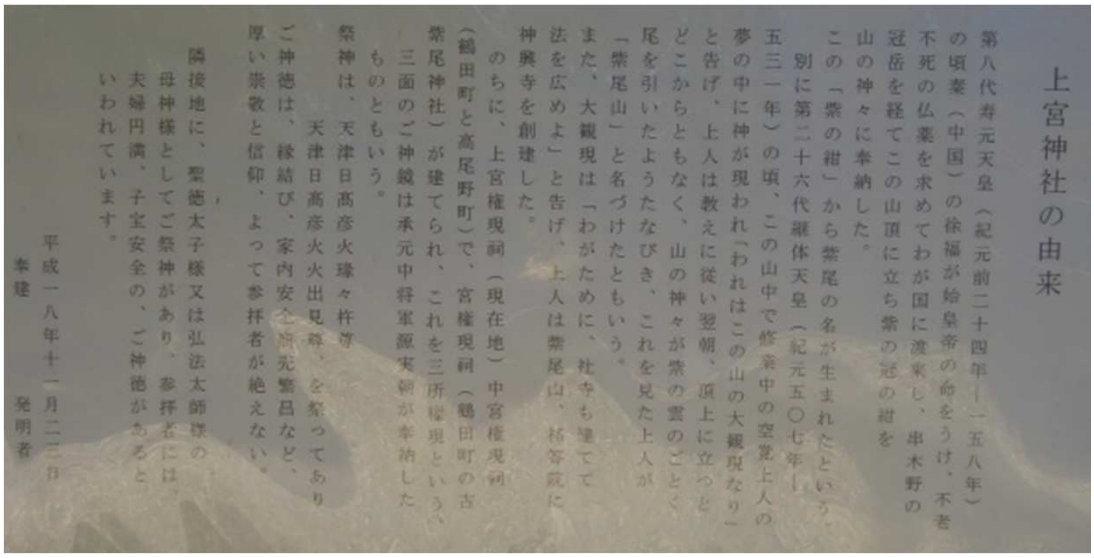
南西の桜島方面

山頂のアンテナ

駐車場から山頂のアンテナ

上宮神社入口

案内板



上宮神社の由来

第八代寿元天皇（紀元前二十四年―一五八年）の頃秦（中国）の徐福が始皇帝の命をうけ、不老不死の仏薬を求めてわが国に渡来し、串木野の冠岳を経てこの山頂に立ち紫の冠の紐を山の神々に奉納した。

この「紫の紐」から紫尾の名が生まれたという。

別に第二十六代継体天皇（紀元五〇七年―五三一年）の頃、この山中で修業中の空覚上人の夢の中に神が現われ「われはこの山の大観現なり」と告げ、上人は教えに従い翌朝、頂上に立つと どこからともなく、山の神々が紫の雲のごとく尾を引いたようたなびき、これを見た上人が「紫尾山」と名づけたともいう。

また、大観現は「わがために、社寺も建てて法を広めよ」と告げ、上人は紫尾山、祐等寺に神興寺を創建した。

のちに、上宮権現祠（現在地）中宮権現祠（鶴田町と高尾野町）で、宮権現祠（鶴田町の古紫尾神社）が建てられ、これを三所権現という、三面のご神鏡は承元中将軍源実朝が奉納したものともいう。

祭神は、天津日高彦火瓊々杵尊、天津日高彦火火出見尊、を祭ってありご神徳は、縁結び、家内安全、所元繁昌など、厚い崇敬と信仰、よって参拝者が絶えない。

隣接地に、聖徳太子様又は弘法太師様の母神様としてご祭神があり、参拝者には、夫婦円満、子宝安全の、ご神徳があるといわれています。

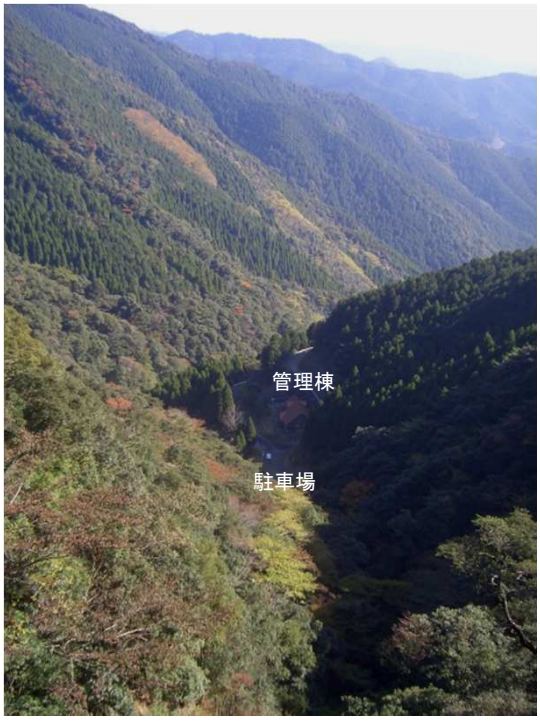
平成一八年十一月二二日　発明者

奉建

上宮神社の由来

上宮神社

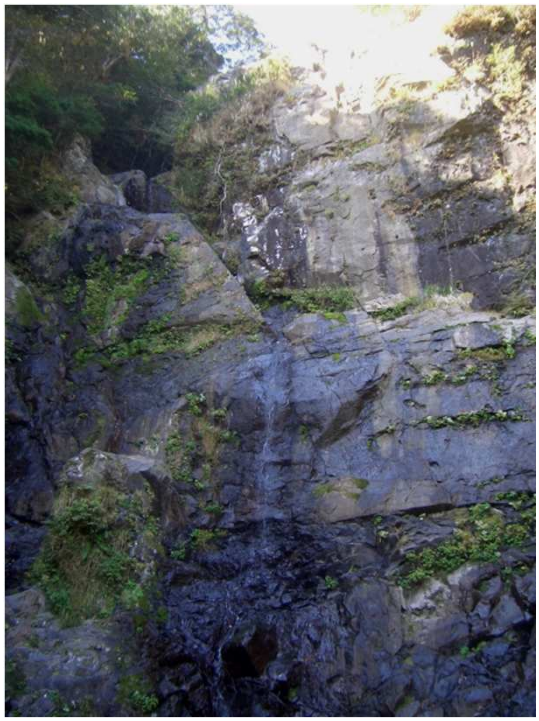
千尋滝の落ち口から下を覗く



千尋滝の落ち口から駐車場を見下ろす

千尋滝の落ち口から駐車場を見下ろす

右岸の観音様


鉄橋から千尋滝を見上げる

林道からの管理棟と千尋滝

林道からの千尋滝

二ノ滝

国道入口の標柱

柴尾温泉

柴尾神社

紫尾神社略記

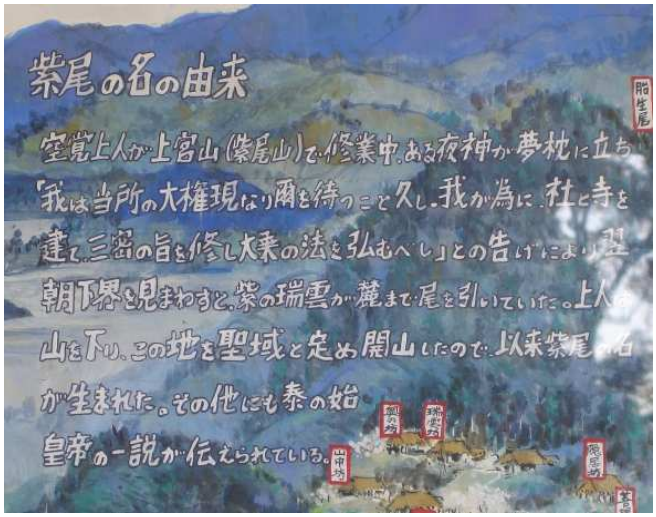
祭神には天津彦瓊瓊祢尊（霧島神宮、新田神社、可愛山稜）天津彦火火出見尊（鹿児島神宮、高屋山稜）鵜茅葺不合尊、（鵜戸神宮、吾平山稜）の神代三代を祀る県神社庁三級社郡内では新田神社の次である。

古くは直接幕府将軍の祀る所であって、後国府（島津）が祭祀に当り特に山野、永野両金山を教へ賜し神社であった。明治の御代に成り五年に県社に列せられ尊崇され繁栄した。第四十六代孝謙天皇天平勝宝、今から一二五一年前、祁答院九ヶ郷（入来、旧山崎、いむた、大村、黒木、佐志　宮之城、鶴田、永野）の宗社（一番最高の御社）として毎年九月二十九日御例祭日で奉幣使（幕府又は国府）巡拝され祭祀が行われており、当日は祁答院地方は無論県下全域から参拝者が多く紫尾山道は行列を作る賑わいであった。

古老の話によれば、特に永野金山を始め嚫山関係の人達の参拝はあとをたたなかったと言われている。

平成十四年十二月吉日

紫尾神社



紫尾権現跡及び紫尾山神興寺跡

種　類　記念物（史跡）

指定年月日　昭和六十年五月十日

指定の理由

紫尾権現は三所（伊弉冊尊・事解男尊・速玉男尊）を主神とし、神興寺の本尊は阿弥陀如来。開基は空覚上人で元亀元年（九州年号・五二二）創建と伝えられ、貞観十年（八六八）に従五位下を授けられている。

神興寺には、仁王門内に十四の坊のほか、菩提院、瑞雲院、徳寿庵、興之院などもあったということである。

紫尾権現は、西国の高野山ともいわれ、遠近を問わず、多くの人々の信仰を集めていたが、天正年間の干魃や数回の火災などにより寺院や僧坊が荒廃した。

永野金山発見により、万治二年（一六五九）銀五百両の寄贈を受け復興されたが、その後、又、衰えたので宮之城神照寺の快善法印が住職となり復興した。以後も盛衰をくりかえしている。

神興寺は、正徳四年（一七一四）島津吉貴により鹿児島南泉院の末寺となっている。

神興寺の位置は、転々としているようであるが、駐車場付近から寺院の瓦が出土している。

その他